



浮萍 一道 開く

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

今回は、私が普段かかわっているピアサポートのA氏を通じて感じたことを中心に取り上げたいと思います。重度障がいを抱える方々にとって、ヘルパーによる介助は生活の中で欠かせない存在です。特に、A氏のように全身の筋力低下が進行し、一日中寝たきりの状態にある場合、体調の変化に合わせ柔軟な介助が不可欠です。A氏は進行性の筋疾患により上下肢を動かすことができず、発声も弱いためナースコールを押すことさえ困難で、また、視力や聴力にも障害があり、コミュニケーションも難しい状況です。こうした状況下で、ヘルパーによる綿密な見守りと適切な介助が、A氏の安全と安心を支える重要な鍵となります。

A氏は呼吸や嚥下機能の低下により、自力での排痰が出来ず、窒息のリスクを常に抱えています。本来であれば、こうした状況下では、常時付き添い、看護師と連携を取りながら迅速に対応する必要があります。また、わずかな体位のズレでも痛みや不快感を感じるため、細やかな体位調整が求められます。A氏は発声が弱く、中耳炎により左耳が難聴、右目は網膜剥離で視力を失うなど、多くの困難を抱えています。こうした複雑な状況において、入院前から支援を受けている介助者による体位調整やコミュニケーション支援は、A氏が安心して入院生活を送る上で必要不可欠です。

病院側からは、呼吸器の脱着やカフ、サクション、浣腸、摘便、陰洗、オムツ交換、入浴支援、移乗・ミルキング、尿はき、服薬確認、バイタルチェック、理学療法によるリハビリ、水分摂取量の確認など、多岐にわたる医療的支援が提供されています。これらの支援はすべて、A氏の安全と健康を維持するために欠かせないものです。ヘルパーはこれらの医療スタッフと連携しながら、A氏の日々の介護に深く関わっ

ています。

重度訪問介護ヘルパーは、A氏の体調や状態に応じて細やかな介助を行います。例えば、適切なポジショニングを提供し、誤嚥のリスクを軽減し、安全な生活環境を維持します。A氏が一人でナースコールを押すことができない状況でも、ヘルパーが常に見守り、必要な時に迅速に対応する体制を整えることで、A氏の安心感を高めます。

ヘルパーの支援は、ただ介助を行うだけでなく、A氏の尊厳を守り、その人らしい生活を支えるためのものです。A氏の場合、長年にわたり信頼関係を築いてきた介助者が体位調整やコミュニケーション支援を行うことで、安心した入院生活を送ることが可能になります。また、ヘルパーはA氏の細かな変化をキャッチし、適切な対応を迅速に行うことで、緊急時にも大きな役割を果たします。

さらに、A氏のケースからは、重度訪問介護サービスが提供する見守りの重要性も浮かび上がります。自治体担当部局によれば、入院中や在宅における見守りの時間はサービスの対象であり、必要なコミュニケーション支援を含む見守りが提供されるべきとのことです。A氏のように自力で呼び出せない状況でも、ヘルパーが適切に見守り、支援することで、安全で安心な生活を維持できます。

重度訪問介護サービスは、障がい者が一人暮らしを実現し、その人らしさを大切にしながら生活を続けるための重要なセーフティーネットです。A氏のケースを通じて、ヘルパーの介助がどれほど重要であるかを再認識しました。これからも、私たちは福祉サービスの質を向上させるために、自身が感じた困りごとを関係者に伝え、積極的に働きかけを行うことが求められます。自らの声を発信することで、サービス提供者や行政が現場のニーズに応え、より良い支援体制を整えるきっかけとなるに違いないと思います。

私たち一人ひとりが声を上げ、福祉サービスの改善を働きかけることで、重度障がい者が安心して自分らしく生活できる社会が実現されると信じ、今年を過ごしたいと思います。